

## 創るシネマ

第44回

# 認知症を生きる若き夫婦のヒューマンドラマ 実話をもとに描く『オレンジ・ランプ』

上田 精一

三九歳で若天性アルツハイマー型認知症と診断された丹野智文さん（四九歳）の日常を描く映画『オレンジ・ランプ』（三原光尋監督）が全国順次公開中である。

映画化のきっかけは丹野さんと山国秀行プロデューサー（五六歳）との中国・上海の認知症シンポジウムでの講師同士の出会いから



だ。山国さんは丹野さんの言動に接し「自分のなかの認知症の人に對する偏見があったことを思い知らされ、さらに丹野さんの明るく誠実な人柄に魅力を感じこれまでない切り口で次の映画の題材にできないかと検討を始めた」という。山国さんはこうも語る。

「この映画は丹野さんの物語ですが他の認知症ご本人の物語でもあり、もつと言えば、これから認知症になっていく私たち全員の物語である」と感じ「彼の奥さんや他の認知症ご本人、ご家族にもお会いし、さらに物語の幅を広げることを決めました」と。

ストーリーは、丹野さんがモデルの只野晃一（和田正人）は自動

車販売会社の優秀な営業マン。妻の真央（貫地谷しほり）や二人の娘と幸せな日々を送っていた。ところが悲痛極まる医師の診断が――。「二年後には寝たきり」のネットの文字に晃一は啞然とする。晃一の身代わりとなってなんでもやろうとする妻の気丈な言動が逆に晃一の不安と孤独感を深めてしまう。だが、認知症の人やその家族との出会いが、前向きに生きる人生へと二人を向かわせ、職場や地域にも変化があらわれる。

実話をもとにした映画化の強みか、真実に満ち胸にぐっとくる場面がふんだんにある。丹野さんの感想がいい。「そのまま」だったなと思いました。真央も妻そのものでびっくりしました。」

先の国会で認知症と共生する社会を目指す「認知症基本法」が成立した。実にタイムリーな映画の完成だ。

（長崎県映画センター理事）